



本日 日曜 二十三日 午後五時 第一二三四五 第六七七八九 第十十一十二 十三十四十五 十六十七十八 十九二十 二十一日 二十二日 二十三日 二十四日 二十五日 二十六日 二十七日 二十八日 二十九日 三十日 三十一日 三十二日 三十三日 三十四日 三十五日 三十六日 三十七日 三十八日 三十九日 四十日 四十一日 四十二日 四十三日 四十四日 四十五日 四十六日 四十七日 四十八日 四十九日 五十日

アジは煽動の意だ英 語のアジテーションを 日本語によつて動詞に したものが彼氏の動詞に つてやれなどとも云ふ 共んな煽りをかける男 をアジターと云ふ

自動車の五台設置 平町では昨日四日警備委員会を 開き常備消防設置その他に關 して協議されたことは既報の如 くだが常備消防の設置は来る 十二月頃からしくそのため に増加する經費は五、六百 圓位の模様で左記警備委員は 今五日夜の準備で井上組頭並 に町役場松本庶務書記と共に 崎玉橋下に於ける熊谷、秩 父、大宮の各地を視察する七 日歸町の管である尚ほ従来の 撤水車を改造これに瓦斯ポン プを載せて自動車ポンプとな す計画も決されたが同費 は約三百圓の由で平町には之 れで自動車ポンプ五台を備へ られる譯である

川工事一束 江名町大字永崎字川畑橋地 内の土橋修繕は去月二十三日 竣工、工費九十圓 ▲平町飯野村境界谷川瀬新 田橋地内の橋梁修繕工事は去 月二十四日竣工、工費五十七 圓 ▲玉川村大字住吉地内の暗渠 伏設工事は去月十六日竣工、 工費は三十二圓 ▲小名濱泉村境界松本泉町地 内の道路修繕は去月十六日竣 工、工費六十二圓

小川江筋の第二期工事 一日より愈々開始 平町堀江工業會社の手により 第一期工事を了した小川江筋 組合では更に第二期工事決定 のため先頃平町事務所樓上 に臨時總會を開いた結果管理 者一任と決定再び堀江工業の 手より材料供給を受ける事と 決定工費六千五百八十圓で上 平窪若ヶ澤地内より同村眞野 井迄工事開始することは既報 されて置きます、従つて下流の 魚類は此の香料に傳はつて逐 次上流に上り竹筒を傳はつて 「たらひ」即ち洞の中に入ると あります、又夜間は燈火を點 じて各種の魚類を突きます、 之れは夜間魚類の休止する習 性と夏季魚類が夜間岸邊に寄 性を利用して行ふので 作つたもので土生を取つたり 特製の狭小網を繰り取つたり 致します、夜間の燈下は根松 石油などを使用したものです が最近カ、ハイトを使用す るのが、簡便になりました

燈下漫錄(三) (管見)此句柴の戸とすれば 冬、霜雪を恐る程の事もあ るまじと思はるゝが城門とすれ ば何さま思案に感ふのも無理 ではない、芭蕉も初めは柴の 戸と讀んだからあんな事も云 つたので大津へ行つて此木戸 と考へついたので慌て、手紙 をよこしたものと思はれる、 夫れにつけても俳句は短詩形 な丈に措辭に注意しないと 飛んだ失敗をすることもあ る、最現代人ならこんな場合に は必ず此城戸と云ふ様に字を 當て、書かからこんな心配は いらぬかも知れぬ其角も現代 人にならつたらこんな有名な 話しも残らなかつたかも知れ ぬのである

### 安島候補支援の爲 醤油業組合の結束

酒造組合の團結力に對應して 其の影響が何れに多いか

石城郡の所得調査委員選舉は ても勿論町から出た同業安島 期日切迫と共に猛烈な運動を 展開されつゝあることは昨報 開いて結束した此の團結が相 當他候補に打撃あるを唱ひら れてゐる影響が何れに深く食 までを續つて自己開拓に余念 なきを見て来たが酒造組合の 推舉にガツチリとした力を 持つ鈴木太郎候補の陣營に 於ては郡内醤油醸造組合に於

四倉藪相場 四倉町四日瀬出荷總数は千八 百七十一貫三百九十石で相場 は左記の通りである 高値二十八圓 低値二十一 圓 期二十六圓 掛目二十

物凄イスローガンを押立て 第六回健康保險運動會 主催縣警察部健康保險課 場所縣立磐城中学校々庭

既報の如く縣警察部健康保險 課主催の第六回健康保險課保 險者の陸上運動競技會は来る 七日縣立磐城中学校々庭に開 されるが運動會の目的とする ところは是迄産業第一線の團 士である工場、礦山、從業員の 健康保持増進策として養護講 習會、陸上運動會、体育講習 會等を開催し鋭意之等の施設 に努めたる結果その成績見る べきもの多かつたが就中陸上

設計豫算十二萬圓が 土木査定官五名の 二日間陽本に陣を布いて

### 土木査定官五名の 二日間陽本に陣を布いて

全國各府縣の災害復舊工費費 千五百萬圓にして多少の増加 の申請も殆んど出揃ひ、内務 省土木局では臨時總會招集を 前に各府縣の災害調査を急ぐ こととしこれに對する協働の 結果土木局、土木監督所を總 動員して技師七十名を十五班 に分ち一班は二縣程度を支持 昨三日から一齊に災害の檢 査に取かゝつた復舊豫算の査 定は嚴重に設計の粗漏等は特 に注意し必要の最少限度に止 むること、その他決定した尙 全國各府縣の申請にかゝるは 災害復舊土木事業費總額は九 師以上五氏が中村浪江の査定

關西の風水害地へ 義金百五圓八十四錢 今日町役場を経て贈る

平消防組では關西に於ける風 水管に贈る義捐金造成の爲め 昨四日同町世界館に上映せる 活動寫眞消防手を後援し他 面に於ては火防宣傳に資すべ 一般の觀覽を奨めた結果當 引いた百五圓八十四錢(純 日非常大入りで収入二百五 十五圓六十錢)を今日町役場を経て 右災害地に寄贈した

川魚の習性と 其漁法 丁度竹筒の上面が全網の面 と一致する様に作るのであり ます、此の特種の網を河底に 平に沈めて其の上面即ち金網 面を河底面に一致する如く設 備して竹筒の入口の直ぐ上流 に適當の大きい石を置きま す、「たらひ」の内部には磯め 油鹽、ビス、或は香料等を入

書道用半紙 厚口……一帖八錢 薄口……一帖五錢

漫談(一) 發生映畫の夕 平町青年會では資金増成事業 として来る十月十三日午後六 時から平町樂樂館に於て漫談 會を開いた

### 燈下漫錄(三)

管見)此句柴の戸とすれば 冬、霜雪を恐る程の事もあ るまじと思はるゝが城門とすれ ば何さま思案に感ふのも無理 ではない、芭蕉も初めは柴の 戸と讀んだからあんな事も云 つたので大津へ行つて此木戸 と考へついたので慌て、手紙 をよこしたものと思はれる、 夫れにつけても俳句は短詩形 な丈に措辭に注意しないと 飛んだ失敗をすることもあ る、最現代人ならこんな場合に は必ず此城戸と云ふ様に字を 當て、書かからこんな心配は いらぬかも知れぬ其角も現代 人にならつたらこんな有名な 話しも残らなかつたかも知れ ぬのである

燈下漫錄(三) (管見)此句柴の戸とすれば 冬、霜雪を恐る程の事もあ るまじと思はるゝが城門とすれ ば何さま思案に感ふのも無理 ではない、芭蕉も初めは柴の 戸と讀んだからあんな事も云 つたので大津へ行つて此木戸 と考へついたので慌て、手紙 をよこしたものと思はれる、 夫れにつけても俳句は短詩形 な丈に措辭に注意しないと 飛んだ失敗をすることもあ る、最現代人ならこんな場合に は必ず此城戸と云ふ様に字を 當て、書かからこんな心配は いらぬかも知れぬ其角も現代 人にならつたらこんな有名な 話しも残らなかつたかも知れ ぬのである

燈下漫錄(三) (管見)此句柴の戸とすれば 冬、霜雪を恐る程の事もあ るまじと思はるゝが城門とすれ ば何さま思案に感ふのも無理 ではない、芭蕉も初めは柴の 戸と讀んだからあんな事も云 つたので大津へ行つて此木戸 と考へついたので慌て、手紙 をよこしたものと思はれる、 夫れにつけても俳句は短詩形 な丈に措辭に注意しないと 飛んだ失敗をすることもあ る、最現代人ならこんな場合に は必ず此城戸と云ふ様に字を 當て、書かからこんな心配は いらぬかも知れぬ其角も現代 人にならつたらこんな有名な 話しも残らなかつたかも知れ ぬのである

燈下漫錄(三) (管見)此句柴の戸とすれば 冬、霜雪を恐る程の事もあ るまじと思はるゝが城門とすれ ば何さま思案に感ふのも無理 ではない、芭蕉も初めは柴の 戸と讀んだからあんな事も云 つたので大津へ行つて此木戸 と考へついたので慌て、手紙 をよこしたものと思はれる、 夫れにつけても俳句は短詩形 な丈に措辭に注意しないと 飛んだ失敗をすることもあ る、最現代人ならこんな場合に は必ず此城戸と云ふ様に字を 當て、書かからこんな心配は いらぬかも知れぬ其角も現代 人にならつたらこんな有名な 話しも残らなかつたかも知れ ぬのである

燈下漫錄(三) (管見)此句柴の戸とすれば 冬、霜雪を恐る程の事もあ るまじと思はるゝが城門とすれ ば何さま思案に感ふのも無理 ではない、芭蕉も初めは柴の 戸と讀んだからあんな事も云 つたので大津へ行つて此木戸 と考へついたので慌て、手紙 をよこしたものと思はれる、 夫れにつけても俳句は短詩形 な丈に措辭に注意しないと 飛んだ失敗をすることもあ る、最現代人ならこんな場合に は必ず此城戸と云ふ様に字を 當て、書かからこんな心配は いらぬかも知れぬ其角も現代 人にならつたらこんな有名な 話しも残らなかつたかも知れ ぬのである

燈下漫錄(三) (管見)此句柴の戸とすれば 冬、霜雪を恐る程の事もあ るまじと思はるゝが城門とすれ ば何さま思案に感ふのも無理 ではない、芭蕉も初めは柴の 戸と讀んだからあんな事も云 つたので大津へ行つて此木戸 と考へついたので慌て、手紙 をよこしたものと思はれる、 夫れにつけても俳句は短詩形 な丈に措辭に注意しないと 飛んだ失敗をすることもあ る、最現代人ならこんな場合に は必ず此城戸と云ふ様に字を 當て、書かからこんな心配は いらぬかも知れぬ其角も現代 人にならつたらこんな有名な 話しも残らなかつたかも知れ ぬのである

